

関西学院と『讃美歌』

— 由木 康^{ゆうき こう}を中心に —

北村宗次

はじめに、由木康先生との出会いからお話をさせていた
だきます。私は戦後、復興された関西学院大学神学部の一
回卒業生ですが、卒業に際して礼拝について学び、それ
を論文の主題にと思っていたところ、新約学主任教授の
松本治三郎先生が、それならば東京に行つて由木先生に挨
拶をして指導を請うようにして来なさい、と言われました。
日本基督教団讃美歌委員会主催のキリスト教音楽講習会と
いうのが毎年夏に開かれていて、私は以前、そのような機
会に由木先生にはお会いしていたのですが、松本先生のお
すすめで改めて先生のご自宅をお訪ねして挨拶をし、ご指
導願ったわけです。その後、私は大学院二年を修了して甲

子園教会の伝道師、それから宝塚教会の最初の主任牧師と
して十年勤めさせていただいたのですが、その後はスコッ
トランドのセント・アンドリュース大学に参りました。ス
コットランドにおります間に由木先生からお便りがあり、
東中野教会に来るようにとお招きをいただいたのです。私
はよく考えた末、お引き受けしようと思い、スコットラン
ドを一年で切り上げて、一九六七（昭和四二）年の秋、東
中野教会の牧師に就任しました。由木先生は直ちに主任牧
師になるようにと言われたのですが、まだ先生はお元気で
したし、そのまま主任に留まっていたきたいとお願いを
して、私は協力牧師として、文字通り協力をさせていた

きました。数年後、由木先生は七十歳になられ、隠退するからということで私に後を譲られました。

ところが、それから十数年した時に、私は神戸栄光教会からの招聘を受けたのです。直ぐにはお断りしました。しかし、招聘の交渉はその後もずっと続きまして、ある時、由木先生にこんな話があるのですと打ち明けたら、しばらくじっと考えておられて、「その招聘を受けなさい」と。「それは神の御心かもしれないから」と言われたのです。そして最後に、「でも、私の葬儀はあなたがやってくれるのですよ」と。それから、先生はお元気でいらしたのですが、数年後のある冬の日曜日の午後、先生のお宅で家庭集会があつて、そこに長女のご家族も住んでいらしたのですが、そこでの壮年会に出てこられて「話しておきたいことがある」と話されてから静かにお部屋に引き込まれ、そのまま亡くなっておられたのです。大往生です（一九八五年一月二十七日）。そして葬儀の司式は、私がさせていたただいたのですが、亡くなられた後すぐ、由木先生からお預かりしていた封書を開けてみましたら、式次第も讃美歌も全部書いてあるのです。私はそのままそれに従つてやればいい、ということだったのです。その葬儀の直前に神戸栄光教会から電話があつて、「招聘は引き受けてもらえないの

ですか」と。「いや、今はそれどころではない。いまから由木康先生のお葬式が始まるころだから」と電話を切ったことです。その後、日が経つにつれて由木先生が「御心かもしれないから、行きなさい」と言われたことが気になり、結局、一年後、由木先生の一年の記念会を済ませて数カ月してから神戸に移つて来たような次第です。由木先生の不思議な存在、私は先生の最後の数年間、身近に居らせていただいたのですが、私が神戸に行くということについても、おっしゃったことは、本当に不思議な力を持つて、私を導いてくださったのだと思っています。

それではレジュメに従つて話を進めさせていただきたいと思ひます。与えられた主題は「関西学院と『讃美歌』です」「聖書と礼拝なくして学院なし」と、かつて吉岡美国院長が語られたと聞いていますが、学院では設立当初から礼拝が行われ、聖書が読まれ、讃美歌が歌われたことは当然のことであると言えます。関西学院は一八九九（明治三二年）に創立されましたが、日本での讃美歌の歴史は一八七二（明治五）年に始まります。当初は各教派ごとに讃美歌が作られていました。関西学院が始まった頃は「讃美歌 一」が用いられていたと考えられますが、「讃美歌」と書いて

「たたへうた」と読ませていた時代です。ここにあるのが一八七四（明治七）年に出されたメソヂスト系の最初の讃美歌集として発行されたものです。そこには五十三編の歌が入っています。本体は歌詞だけで糸綴じのものです。楽譜はあとに別紙でついています。それから二年後に「改正讃美歌」が出ます。これも歌詞だけです。また変体仮名ですからちよつと読むのに苦労します。

そのことはおいて少し廻り、わが国における讃美歌の歴史は、記録されているものとしては、一八七二（明治五年）、横浜で開かれた第一回宣教師会議の席上、邦訳讃美歌二編が呈示されたとあります。それは現在の「主われを愛す」「讃美歌21の四八四番と、「あまつきくにはいとたのし」、これは「讃美歌21」にはありません。「21」の前の讃美歌、一九五四年版の四九〇番です。「主われを愛す」は、「*God loves me, this I know*」です。「エス、われ愛す、聖書さう申す」と最初歌われたのです。私はかつて遠く新潟県から関西に、関西学院にやってきたのですが、そこで初めて聞いたのが「主われを愛す」を「エスさんわてを好いてはる」という歌い方があるということでした。大阪弁、関西弁の「主われを愛す」のことですね。また、一般に「讃美歌」と表示されているもの、それも「さんびか」と読むよ

うになったのは二十世紀に入ってからです。まず、讃美歌一九〇三（明治三六）年版。これが明治版の「讃美歌」です。私は第八版昭和二年に出されたものを手許に持っていますが、その次の讃美歌は一九三一（昭和六）年版のものです。この讃美歌はゴンベンのついた讃美歌ではあるのですが、「夫」がふたつ並ぶというところ、その時の讃美歌は「先」という「先生の先」、「先先」と書いています、それに貝の字（讀）。三番目には一九五四（昭和二九）年、これはちょうど私が神学部を卒業して牧会に出ようとしている時に出版されたのです。「戦後版の讃美歌集」と呼ばれています。それに加えて「讃美歌第二編」というのが刊行されています。かつて明治版「讃美歌」のあとに、「讃美歌第二編」一九一五（大正四）年に発行されたものもあります。私の持っているのはその第三版で、私の母親が使っていたものですが、もう一つは最近の「讃美歌第二編」一九六七（昭和三八）年です。それは私が讃美歌委員会の責任を持たされてから最初に出されたものです。その次に改訂準備の特別版として「ともにうたおう・新しいさんびか50曲」という小さなものを出しました。一九七六（昭和五一）年。その後「讃美歌21」が一九九七（平成九）年に発行され、これが現行の讃美歌集となるわけです。

「讃美歌21」とわざわざつけましたのはいろいろ考えた末です。通常三十年経ったら讃美歌改訂になるのですが、その準備の版として「ともにうたおう 新しいさんびか50曲」を出したのです。いろんなことがありまして、「讃美歌21」という名称にすることに相談の結果なったわけです。讃美歌に「21」がついているのは珍しいことでしょうが……。新しく二十一世紀を迎えるにあたって、このようになりました。

日本人讃美歌作詞者と由木康の作品

次に日本人創作の讃美歌詞について述べていきます。一九〇三（明治三六）年に、いわゆる明治版の讃美歌が出ました。それと、その次に出ました古い「讃美歌第二編」、一九一五（大正四）年版では、邦人創作歌詞の作者名が挙がっていないですね。どうしてですかね。外国人の名前は出ているのですが、どうして日本人の名前を隠したのだろうかと思います。その次に一九三一（昭和六）年、私の生まれた翌年に出されています。父親も農村伝道していましたが、古い讃美歌を使っていましたから、子どもの頃聞いた讃美歌はみんな明治版あるいはこの第二編からでした。讃

美歌が新しくなったということは教会のなかでも大きな話題になったことを今でも覚えています。この一九三一年版の讃美歌では、日本人の作詞者の名前は出てくるのですがこれもどうしたことかローマ字表記です。それも名の方が先で姓が後という英語式ですね。私のレジヌメには姓名という順序で書きました。漢字がわからない方もあります。はじめにAmano Tsunejiro（天野恒次郎）、一曲だけですが、「四五七番 神のめぐみは いとたかし」。次にBessho Umenosuke（別所梅之助）、日本の讃美歌の歴史上たいへん大事な人で、最初のメソヂスト教会の讃美歌以来、メソヂスト教会の讃美歌の代表的存在でした。由木先生が出られる前のことです。青山学院中心に活躍された方です。そのBessho Umenosuke先生の讃美歌というのは三曲あって、「一八七番 いまもむかしの ためしとて」とか、「四三四番 いらかをきそひ」、それから「五二四番 花よりも愛（め）でにし わが子よ」。それから、Fujimoto Denkichi（藤本伝吉）の作は五曲あります。Kega Sumi（気賀）「四八二番 黄金（こがね）もたまもなにかあらんと」。明治二〇（一八八七）年版の「基督教聖歌集」からも七曲ほど採られています。

その次のMatsuyama Takayoshi（松山高吉）。この人

は明治時代の組合教会で、非常に大事な役割を果たした人で、神戸女学院でも教えていたと思います。「四一二番

わがやまとの くのをまもり」がよく歌われていたものと思います。「四一二番 あまつみくらに ましまして」

「四二三番 いかづちをばくるまとし いなづまをつるぎとし」など四曲あります。それから Miwa Genzo (三輪源

造)、「この人のは三曲。Miyagawa Isamu (宮川勇)、「この人も同志社系で、たいへん大事な役割をした人で、七曲あ

ります。それから Nishimura Kiyowo (西村清雄)、Okuno Masatsuna (奥野昌綱)。

それから、Suzuki Kiyomitsu の「三六三番 かみのみころ しらずして」Uemura Masahisa の「四八六番

さりにしひとを しのぶれば」。このように当時のキリスト教をリードしたような人たちが讃美歌を作って遺してく

れています。

そして由木先生。Yuki Koh (由木康)「七三番 せいなる御神は」「一二二番 馬槽のなかに」などのほか全部で八曲あります。作曲者名もレジュメには書いています

が、二番目の Abe Seigi (安部正義)「それから」「二三四番 みよ世をこぞり」は関西学院の神学部出身の Shuichi

Tsugawa (津川主一曲)。三〇五番「この世のつとめ

とせはしく」もそうですね。Ugo Nakada (中田羽後)、この人は伝道隊のリーダーでした。

その後の讃美歌集に出てまいります Yuki Koh 原作による讃美歌は、一九五四(昭和二九)年版です。さきほども

話したようにちょうど私が、神学部を卒業して牧会に出る時に出了た讃美歌です。「一八番 cruger 曲」この歌は

このとき初めて出たのですね。「一二二番 馬槽のなかに」これは前の版にすでに出ています。それから「二二五番

すべてのひとに のべつたえよ」「三七七番 時代のゆくべは」その前の「二八二番 み栄えは主にあれ」など

は、当時の讃美歌としては新しく見出していたものだものです。由木先生が讃美歌委員会の代表者として編集の責任

を持っていらしたのですが、新しいものを生み出そうとすると、結局ご自身が作らなければできないというようなこ

とがあったようです。「すべてのひとに」「み栄えは主にあれ」「時代のゆくべ」などは、そういう意味で由木先生の

創作詞として大事な役割を果たしてくださったものです。

讃美歌改訂の必要性和問題

その頃、私が牧会に出ましてから新しい讃美歌が普及さ

れてくると、今度は新しい讃美歌が求められるという時代になるわけです。特に一九七〇年代というのは、カトリック教会の典礼改革がなされ、プロテスタント関係でも諸外国の讃美歌集がどんどん新しくなるという時代だったので。私の委員長の時には新しい讃美歌としては今どんなものが必要なのだろうか、また生み出されているのだろうか、また提供できるだろうか、というような時代で、その結果「ともじうたおう、新しいさんびか50曲」を出したのですが、そのなかでも、由木先生にいわゆるエキユメニカルな（教会一致の）讃美歌を書いていただいたのが「一番すくいの道を 開いたイエスを」です。カトリックの教会音楽のリーダーである高田三郎先生に作曲をしていただきました。そこにもミーターが書いてありますが、それは音節のことで、7775 7775の型です。これはもちろん、みなさんよくご存知のように、日本の詩というのは、元々こういう奇数の音節でした。俳句にしろ、和歌にしろ、7と5というのが基本です。そういうものを組み入れてこの歌詞は作られているわけです。その頃、私は東中野教会在任中で、由木先生もいつも礼拝に来ていらしたので、いろいろ話し合っってこういうふうな形をお願いしたら、「やってみましょう」ということで作ってくださったのです。そ

れともうひとつは「一二番 週のはじめ わざをやすみ」というのがあります。「礼拝からの派遣」、これも高田三郎氏の作曲で、エキユメニカルなコンビの形でできたのですが、これも礼拝が週の第一日の「主の日」である日曜日に守られて、それから一週の業が始まるのだと、そういう内容の讃美歌がぜひ欲しいと、讃美歌委員会希望が出たのでした。これも「すくいの道を」と同じように、私から由木先生に直接お願いをして、「礼拝からの派遣」というテーマの讃美歌を作っていただいたわけです。このミーターは6676です。珍しい音節形です。

英語の讃美歌などは音節のことでこれもご存知だと思いますが、偶数が多いのです。6686 8686 8888と。6686はショートミーター（短音節）と呼ばれています。8686というのはコモンミーター（通常音節）と訳しています。音節が普通の形、これが英語の讃美歌の基本形です。8888のロングミーター（長音節）の讃美歌というものもあります。この三種類のミーター（音節）の曲が多く、その他数多くの種類のミーターの型が実際にはあります。

そして、いよいよ讃美歌本体の改訂ということになりまして、大きな仕事をさせていただいたわけですが、その時

もいろいろ由木先生に注文をして作っていただいたり、その他、それまでにあったものを受け継いでいるわけです。このようにして「讃美歌21」（一九九七年版）ができたのです。

二番に挙げてある「聖なるみ神は われらの集いに」(Johann Crüger 曲)、これはロングミーターです、けれど区切りが違う、888 888 888という形になっています。楽譜を見ていただいたらわかりますように、最初の888 888は折り返しになっています。それから「一九四番 神さまは そのひとり子を」、これは「子どもさんびか」も同時に平行して讃美歌委員会が編集を担当することになって作られたのです。それまでは讃美歌委員会が扱っていなかったのですが、この時からそうなったのを記念して新しく作っていただき、生み出されたわけですね。これは小山章三という武蔵野音楽大学の作曲の先生に作っていただきました。その他は「二八〇番 馬槽のなかに うぶごえあげ」。関西学院では私の在学中は、一番よく歌われたのだと思います。みなさんは関西学院のチャペルの時、何を一番よく歌ったか、どの讃美歌が印象に残っているか、うかがってみたいものです。「三七八番 栄光は主にあれ」、これは「宗教改革記念日」のためのもので、一九五四年版の「二八二番 み栄えは主にあれ」を

改編しています。それを「讃美歌21」では由木先生にお願いして、「み栄え」ではなくて「栄光」という言葉を歌詞にしていたきたいとお願いしたのです。「やまとことば」的なものをできるだけ避けて日常会話で使われている、あるいは説教などでも直接使っている言葉を讃美歌の歌詞に多く入れたいということで生み出されたものです。「栄光は主にあれ めぐみの神は」と歌詞を変えて載せています。その他「四〇九番 すくいの道を ひらいたイエスを」、先のカトリックの高田三郎先生に作曲していただきました。「讃美歌21」では、索引欄に初めて「作詞者作曲者索引」とし、邦人創作のものの作者表示のローマ字表記を止めて、漢字で表記することにしました。また「讃美歌21」の「略解」というのがありますし、「讃美歌21」の「選曲ガイド」というものには、どういう曲を選んだらいいかなどを示すかなり分厚いものも出されております。

由木康と日本の讃美歌

由木康先生が讃美歌委員会の委員長として責任をもたれるようになってからの、わが国の讃美歌の特性は大いに変化しているといえます。明治版の「讃美歌」である

一九〇三年版の「初行索引」はすべて英語で記されていたと先ほど言いましたが、邦人創作とされるものもすべてローマ字で表記されており、その前に小さな丸印が附けられている程度の区別しかしていません。例として四〇二番は「Build Me now an holy place」とありますが、「きよきところを つくれよと あまつみかみの 宣(の) たまひし そのむかしより いまもなほ みたみにそへる めぐみかな」、これも今ではいわゆる会話調の言葉ではありません。ともかく当時のアメリカの讃美歌集からの翻訳ものが大部分であったのです。そして英語圏の讃美歌は紹介されていたのですが、その後、直接諸外国の讃美歌を採り入れるようになってくるわけです。

次に由木先生の創作歌詞の特性ですが、ゴスペル・ソング (Gospel Songs) を主としていた讃美歌を考えることが少なくなり、ヨーロッパ諸国の讃美歌、聖歌については、その原歌詞からの訳詞が可能になってきた、と言えると思います。それから、日本人の歌詞の形態と内容が個人的な信仰体験に基づいたものだけでなく、公の礼拝や信仰共同体としての教会的な信仰に目覚めるようになったということが言えると思います。

その後、讃美歌委員会の責任者は山北多喜彦先生や藤田

昌直先生の時期があったのですが、それぞれ一期ずつだったと思います。その当時私は委員に加わっていたのですが、その後、委員長となり、責任をもつようになりまして、日本人の創作に重点を置き、典札改革を経たカトリック教会のものや、アジア諸国のものも紹介し、採用するようになりました。これも私自身が香港やフィリピンなどに行って、現地の教会でどういう讃美歌を歌っているのかということ聞かせてもらいながら、日本にどういう讃美歌が採りいられるだろうかという検討も直接始まったわけです。さらに基本的には新約聖書に記されている「詩編と讃歌と霊的な歌」を見直すこと、詩編、讃歌、霊的な歌というのはどういうふうに解釈するか、これはいろいろ問題のあるところですが、大雑把に言って礼拝の歌、キリスト教共同体である教会の歌、そういうものを日本の教会の讃美歌にも、もつとふやさなければならぬということが自覚されてきたわけです。霊的な歌も個人的に霊的なという解釈ではなくて、共同体的な霊的な歌、即ち教会的な歌というものが求められるべきではないかという時代になったと思います。

その次のところでは、ちょうど時代としてはエキュメニカルⅡ教会一致の時代になったのです。カトリック教会

の典礼改革に対応することがプロテスタント教会においても芽生えるなかで、徐々にではありますが、讃美歌の多様化に反映されるようになりました。その頃委員会の組織では私が委員長を任せられたわけですが、そのなかで先ほど話しましたが、新しい時代にどういう讃美歌が生み出せるのかということと「ともにうたおう 新しいさるびか50曲」が一九七六（昭和五一）年に出されています。五十曲選ぶだけでいぶん苦勞をしました。たくさん作品のなかから選ぶわけですから。そして、その二年前の一九七四（昭和四九）年はわが国における讃美歌発行一〇〇年記念の年だったので。「今日の信仰の歌」ということで編集をするために、日本カトリック教会や日本福音ルーテル教会、日本聖公会からの委員、その他プロテスタントの教派はたくさんありますから、日本基督教協議会（NCC）の総幹事に代表して委員に加わっていただきました。このようにエキュメニカルな編集委員会を組織して、そのなかで編集されたのが「ともにうたおう」であります。すでにお話したように「教会はひとつ」を副題につけて「すくいの道を 開いたイエスを」という歌い出しの由木先生の歌がこのとき入ってきたわけです。

このような時代の要請に応えることのできる讃美歌作詞

者は、珍しいと言わざるを得ないです。由木先生の背景には、同じひとつの教会に三十五年間牧師として勤めたこと、あるいはパスカルの「パンセ」の翻訳者であること、わが国のプロテスタント教会の礼拝学の基本的な著作を成し遂げた先駆者であるということなどから、相互作用的に働いて、新しい見解を発展させることのできる稀有な存在であつたからであらうと私は受け止めています。

教団の讃美歌委員会の委員のことで言いますと、関西学院関係の方では妹尾活夫先生に讃美歌委員に加わっていたことがありますが。白川達正先生は、教会学校関係でNCCの主事もしていらした時に、入っていただきました。そのようなことで関西学院は日本の讃美歌の歴史においては大事な役割を果たすように導かれて来たのだと思っております。日本の讃美歌がどんなふうになって来たかということ、そのなかで由木康先生の役割というのがどんなに大事であつたかということをお話させていただきました。

神田 どうもたいへん貴重なお話ありがとうございます。お話にもありましたように由木康先生と身近なところずっと歩んで来られた北村先生だからこそのお話だったと思います。せっかくの機会ですからいろんな形でご意見な

り、あるいは先ほど北村先生からご質問のあった関西学院のご卒業の方は学生時代にはどんな讃美歌がお好きだったかとか、そういうことも含めて讃美歌にまつわること、北村先生にどんどんご質問を出していただけたらと思います。

—— いろいろお話を日常的にお聞きしていますが、こうしてまとまって何うのは幸いです。今日のタイトルは「関西学院と『讃美歌』」です。ずいぶんと関西学院と讃美歌との繋がりがあつたのだとあらためて考えさせられます。関西学院でどういう讃美歌をよく歌ってきたかと、私も中学部時代からずっとチャペルで、さつきおっしゃった「まぶねのなかに」これは中学、高校で一番よく歌う歌ですね。大学では比較的「昔主イエスの 蒔きたまいし」とこれがよく歌われているのではないかと思います。いろいろお話が出ると思います。それと、前から考えていたのですが、一番よく中学生時代から歌っている元の「一二三まぶねのなかに うぶごえあげ」これは生涯のなかで何百回と歌うかもしれないと、あの歌詞が一節から三節まではナザレの人間イエスがずっと歌われて、四節には「この人を見よ この人こそ神のひと」とこれは確か北村先生からお聞きしたのではないかと思うのですが、記憶では由木康先生がこの作詞をされる時にたいへん祈って、苦しんで福

音書に基づいて人間イエスの人びとに仕える愛というものを歌い上げている。しかしそれが当時神学的にはリベラルな神学が入ってきた時代で、それに共鳴をすると同時にそれでは讃美歌にならないのではないかとそこで四節の「この人を見よ この人こそ 神の人」とそれが付け加わつたと、それが由木康先生のなかで非常にある意味では神学的な戦いがあつたとお聞きしたのですが、由木先生は日本におけるパスカル研究のバイオニアのひとりでありました。先日、森川甫先生が訳されたパスカルの「イエス伝」が出版されました。それをすぐに一日かけて読み通しました。聖書学の話に入ることとは避けますが、パスカル自身による「イエス伝」、パンセが書かれたときに、パンセの原稿とパスカルの「イエス伝」の原稿が並んで置いてあつたのを家族の人が見出して公にしたということが書かれておりました。そのパンセの「イエス伝」を読むと、いわゆる聖書の専門的な学問が発達して批評学、伝承学、編集史学、いろいろ出たんですが、今でもパスカルの小さなイエス伝というのはいへん珠玉のイエス伝だとあらためて感じました。由木康先生が「まぶねのなかに」の讃美歌を作られた時に、パスカル自身の書いた「イエス伝」を読まれたのではないかと、そしてそのことがひとつの活路を見出すと

いうか、先生が悩んでおられた問題を克服するひとつの導きになったのではないかと個人的に想像していたのですが、北村先生、そういうこと、パスカル研究、パスカルの「イエス伝」と讃美歌「まぶねのなかに」なにか結びつきがあるかということ知りたいなと思いました。

北村 それは確かにあると思います。日本のキリスト教会の歴史から見ると歴史はたいへん興味深いと思います。由木先生が二十五歳のとき、関西学院英文科を出てから神戸の聖書神学校で学ばれたのですが、その途中で、野口幽香という東京で二葉保育園を起こした人が、単立教会を始めようとして若い由木先生を懇請され、由木先生はお母さんと一緒にまだ若い独身時代に上京して独立教会の牧師になれるのです。先生は山陰の方では聖公会出身です。その後学ばれた関西学院はメソヂストです。卒業後、聖公会の伝道隊のような形で神戸にしばらくおられて、東京に行つて二葉独立教会の牧師になられる。ところが、それがそのままだったらまた変わったかも知れませんが、一九四一（昭和一六）年にわが国のプロテスタント諸派の教会は、日本基督教団というひとつの合同教会にさせられた。これは日本政府の政策ですから、いろいろな議論される場所です。でも教団になり、由木先生が教団のなかで生かされた

ということが、私は不思議な展開となったと受け止めています。そのなかでパンセのことやいろいろなことが絡んでくるのです。現象的に見ると二葉独立教会も二葉教会になり、次に東中野教会になり、教会は名前だけ変わるのですが、牧師と教会そのものは変わっていないのです。由木先生がずっと牧会してこられた。そのために由木先生が教団のなかで生かされたのは非常に大きな不思議なことだと思っております。

—— 津川主一氏は大正一〇年、旧制神学部のご卒業です。結局は牧師としてしばらく勤められたけれども後には合唱音楽の方に集中された。しかし、由木康先生は文学部英文科の出身で、牧師として今お話のように日本を代表する讃美歌作者となられた。関西学院がある意味そういうアカデミックな面でも広がりを持っていたということの証しだと思います。

北村 そうですね。おっしゃるように関西学院の良かったという点ではないかと思っています。

神田 先ほどご紹介の挙がっております「讃美歌21」の「四九七番」、いまご紹介されましたが、「この世のつとめいとせわしく」。祈りのタイトルでよく歌われる讃美歌のひとつですが、これがまさに今おっしゃった由木康先生の

作詞で津川先生の作曲、関学コンビです。津川先生、ご存知だと思いますが、のちにフォスターを日本に紹介をされた方です。

—— 私は関西学院の卒業生ではありませんが、ホームページを見てこちらの講演をぜひ聞きたいと思い参りました。私は聖書や讃美歌を通して日本人とはなんだろうという疑問を思っ、て信仰生活に導かれました。それで、言葉の移り変わりにたいへん関心をもっています。言葉が時代とともにある程度移ろうものと思うのですが、その時の価値観とかも反映されていると思いますので、讃美歌が常に言葉を改訂されるということにも関心を持っています。先ほど先生のお話のなかに、三十年ぐらいたら言葉を、讃美歌を改訂して見直していかないといけないというお話の理由をもう少しおうかがいしたいのと、大和言葉は避けて日常説教で使われている言葉を使うようにという希望があったというお話、私は実際わからない大和言葉はたくさんありますが、その言葉を通して、日本人の叙情性とか自然観とかそのなかにも神（カミ）観とか学ぶこともたくさんあると思いますので、もとのことを知ってこれからのことを考えていきたいとおもっています。その点についてもう少しお話が伺いたいと思います。

北村 難しいですね。結論的に言えばそういう広がりがあることが大事です。お互いに受け入れあつていくということが大事だと思うのです。大和言葉がだめだというわけじゃないです。大和言葉だけだとわからないという人が現に若い人に出て来ているわけです。もちろん、そう言いながら百人一首とか古い言葉も残っていく伝統はあるのですが。教会つてそうしたら何だろうか。やはり古いものを大事にするということもあるのですが、新しい時代、特に日本のキリスト教の場合には、百年以上経ってもクリスチャンの人口が増えないということもはっきりしているわけですが、それを何とか打開していく。一般の日本人に広まっていってキリスト教としてはどういうあり方が求められるのだろうか、もちろん聖書の訳も説教の言葉も、そして讃美歌はいちばんある意味では残りますから。「歌」というのは「訴える」から歌だということも言われますけれど、「歌で訴える」と本当に心に残って長く続くわけです。そういう大事なものを担っている讃美歌という歌は、絶えず吟味してはならないと思います。どんどん変えたらいいというわけではないですが、本当に善いものにしていかなければならないだろうと思いますね。常に教会の課題にしていくわけです。

—— 私は北村先生と同期だと思っています。一九五三年大学卒業です。宗教とか讃美歌にはまったくの素人なのですが、ひとつだけ強烈な印象がありまして、今でも覚えていますが、いちばん最初に関学に来て歌った歌が「蛍の光」という別れる時とか終わりの時に歌う歌で、それが入学式で歌われました。それで驚いたのです。ただし、歌詞はまったく違い、「めざめよ、わが霊　こころ励み」で、蛍の光とは内容はまったく違うのでそれなりに理解はできるのですが、曲はまったく同じでしたので、驚いたことを覚えております。そういうのはどうなのでしょう、ずっとそのままいかれるのでしょうか。

—— 歌詞と曲の組み合わせですが、よく知られたメロデーにあとからつける替え歌はほとんど減りつつあります。というのはいまおっしゃったように「蛍の光」のメロデーを歌えば「さようなら」のイメージなんです。それにどんなに美しい立派な歌詞をつけてもみなさんの「蛍の光」のイメージは強いんです。ですからこの組み合わせはだんだんと減りつつあります。あらためて新しい曲をつけるという傾向にあります。

北村　そうですね。基本的にやはり歌詞ができてそれにいちばんふさわしい曲がつけられるということが望ましい。

いい曲だからこれにこの歌詞をつけて歌おうというのはあまりよくないですね。

—— 礼拝の時何気なく讃美歌というのは掲示されていて歌っているのですが、作詞者を見て由木康先生の歌だと気づいた時はうれしかったです。それから、歌詞をよく見ますと、世の中が騒ぐとか、いろいろ世の中の動きがあるなかに教会というのがちゃんとひとつということが歌われ、つまり変わるものと変わらないものとキリスト教のメッセージの非常に大事な点が歌詞のなかにちゃんと入っているというのを、素人ですが何となく感じます。感想だけです、ありがとうございます。

—— 本題からはそれるかもしれませんが、教団でない他派の教会で「聖歌」というのを使っています。「讃美歌21」がエキユメニカルで使うことが広く多くなってきたのですが、「聖歌」はいつ頃できて、どのぐらいの広がりをもっているのでしょうか。

北村　「聖歌」の前に「リバイバル聖歌」とその伝統があるのだと思います。あまり詳しくは今、話せませんが。先ほどの改革派の教会の方は何を使っておられますか。

—— 一九五四年の讃美歌と「讃美歌21」を使っているところもあります。あと詩篇歌を使っています。

——私は「聖歌」を使っている教会に長くいたのですが、ちよつといま「聖歌」が何年にできたがはつきり覚えていないのですが、中田羽俊先生が編纂された経緯があつて、先生が亡くなられてから版權の問題があつて、今「新聖歌」というのが発行されています。讃美歌の曲も取り入れて従来の「聖歌」の曲と若干新しいものも含めて編纂されています。そして、新共同訳の聖書を使つておられるところは、「讃美歌21」を使つていらっしゃるころが多いかなと思つたのですが、新改訳聖書を使っている流れの教会が「聖歌」を使っているところが多いと思います。ただ新共同訳聖書の普及の方が圧倒的にシェアが大きいので「讃美歌21」を使われている方が多いと思います。私はオーソドックスな讃美歌を大事にしながら新しい歌も歌つていきたいという思ひですごく、今日は興味深いいろんなお話を聞かせていただきました。言葉の問題もそうですし、少し思つていましたのはリズムとか曲調、それもどんどんいま新しくなつていて、私がとてもオーソドックスなものが好きなんです、若い世代の人たちはやはり言葉が分らない、リズムがおもしろくないという声もあつて、でもおもしろいだけが讚美ではないので、やはりそこに伝えるべきものが伝わっていくことがとても大事だと思つてはいるのです

が、そういう意味でこれからまた新しい讃美歌集についてのご意見をお聞きできたのでも感謝しております。

——由木康先生の歌詞というのは非常に洗練された日本語というのを使つておられて別に抵抗がなくて好きですが、個人的にも公共的にも通じるようなマイルドな言葉ですが、お若い頃とか生涯を通して日本文学とかそういう日本語の素養をどうやって培われたかということはおわかりですか。

北村 特にないですが、「パンセ」の翻訳等もし、毎週の説教も、さつきも言いましたようにきちつと整えるということに意を注いでおられたし、またそういうことができる方になつていたと思います。きちんとまとめてらっしゃる。

——質問ですが、一九五三年法学部卒で、グリーククラブにいました。讃美歌にもいろいろと教えられることも多かったです。先ほどお話があつた作詞作曲家の名前がないというお話ですが、実はグリーククラブでは「野ばらの花」というのを長年歌つていまして、メンデルスゾーンの作曲というのだったのですが、ドイツでは知れない。なぜかと言いましたらナチス・ドイツが排斥した。それでユダヤ人が書いた本は全部焚書ということで、焼いてしまったのです。残っていないそうです。曲がメンデルスゾーンで、

作詞がゲートなのですが、ゲートの詩になんと二五四曲、作曲されたというそういう記録があつたそうですが、この本もなくなつてしまつてゐるのです。関西学院のグリーが歌つてゐるメンデルスゾーンというのがはつきりしないのですが、たぶんそうだと思うのですが、嘘を書くはずが無いですしメンデルスゾーンでもおかしくない詩を先輩は訳詞して歌つてゐるのです。それは名前がないのです。先輩は明治の終わりの頃におられた方にかがいましたら、その頃でしたので個人の名前を出すのはおこがましいという、讃美歌の方も同じじゃなかったかと思うのです。

北村 かつてはそうでした。今は著作権、版權というのが大事にされるようになりましたから……。版權や手続きが求められています。

神田 三十年ぐらいというのが、改訂のお話も出ましたけれども、今新共同訳聖書の方も、改訳の作業をスタートしています。ちょうど水野先生がいらっしゃるのでそちらの構想とか何かおありかどうか、せっかくのいい機会だからお伺いしたいと思います。

水野 神学部でヘブライ語聖書（旧約聖書）を教えています水野と申します。日本基督教団讃美歌委員になつて十二年、委員長を二期、四年しております。私は賛美歌学者で

はないという自己認識なのですが、みなさんから委員長をしろと言われてさせていただいております。これから述べることは、讃美歌委員会の公式見解ではないことを前もってお断りしておきます。

一般的には、賛美歌集は三十年ぐらいで改訂されるべきだ、という常識があります。その理由は、ひとつに、先ほどお話があつたように時代と共に私たちが使つてゐる言葉が変わつていくということです。それはもう致しかたのないことで、五十歳の私は二十歳前後の大学生の使う言葉にいららする時があるのですが、でも変わるものですから仕方がありません。教会がどのような言葉を使つてゐるかということには、やはり敏感でなければなりません。

二番目に、信仰の理解というものが変わつてまいります。例えば、一九五〇年代には環境問題というのは信仰上の問題ではなかつたのですが、現在は多くのキリスト者が信仰上の問題だと考えるようになりました。ですから、この間の変化が賛美歌集にも反映されるべきと思われれます。

言葉が変わり信仰の理解が変わるものですから、新しい歌がどんどん生み出されてまいります。そういう新しい歌が小さなサークルで歌われるだけではなくて、より広く歌つていただく方法として、賛美歌集に掲載されて広がっ

ていくことが必要なのです。教会がある時点のキリスト教でストツプしてしまわないように、現在の社会のなかで生きつづけているキリスト教であるという証しが、賛美歌集が改訂されていくことに表されていると、私は思っています。もちろん多くの意見のなかでは賛美歌集は変えなくていい、慣れ親しんだ賛美歌をずっと歌っていればそれでいいのだとおっしゃる方もあります。古いものと新しいものとのバランスが必要です。

現在は、一九九七年に北村先生が中心になって編集された『讚美歌21』が出されてから十七年経っていて、三十年というスパンの真ん中に来ていますので、どうするかを考え始めなければならないところに来ています。費用もかなり人的な労力もいることですから、「改訂します」と言うことができるのではなく、今から作業を始めたとしても、おそらく九七年の『讚美歌21』から三十年後くらいに新しい賛美歌集が出されることになると思われます。ですから、三十年の前半はみなさんに歌ってもらうように努力して、残り後半は、歌っていただいたことを基にしながら次の作業を進める、だいたいそういうスパンが一般的に考えられるでしょう。

例外的に五四年版『讚美歌』は、つぎの歌集が出版され

るまで四三年と長かったのですが、それによって、賛美歌集は変わらないものだと認識を与えてしまったかもしれません。いろいろな事情があることは了解しておりますし、あまり厳しく考えるべきではないと思います。

私からの質問ですが、由木康先生が日本の賛美歌において果たした役割は大きくて、それまでの賛美歌と由木康以降の賛美歌は大きく変わっていると思います。特に、今も歌われています由木康先生の賛美歌のなかには、「神の国」を待望するものが多くあります。それまでの日本人の作詞にはなかったものだと思いますが、これはどこから出て来たのでしょうか。

北村 神の国運動というのもありましたからね。影響されたのじゃないかと思いますが。やはり由木先生が讚美歌を作られていたと、今、日本の教会で少しすんだ考えを持っている人たちが何を考えているかということが、頭にあつたのではないかなと思います。由木康先生は若い人の意見をよく聞こうとされる方でした。ご家族に聞くと、由木康先生のご家族は奥様と娘さんが三人、息子さんがひとりおられたのですが、若くして亡くなられて残念なことです。奥様は、先生のことを「こう、こう、うちのこうはね」と呼ばれる。初めて行った時何があつたのだらうと思いま

した。あまり人としやべらないけれども人のことはよく聞いていると、べらべらしゃべるといふことはあまりしない。説教でも毎回見事に二十分で終るのです。いつも一回ずつ原稿をまとめて来られるのです。ずーっと原稿を書いてきて頁の終わりにピシッと終って説教は二十分。讃美歌は有節歌詞が多いですからそういうものに整えるということに絶えず考えておられたのかなと思います。

神田 由木康先生は、日本だけではなく海外でも、日本を代表する作家です。「関西学院と『讃美歌』」というテーマで有益なお話がたくさん聞くことができました。ありがとうございます。

（フロアからの質問や意見の発言者は一部を除いて匿名としました）